

錦びわ水藤錦襪、藤摩琵琶浅野晴風両氏の贊助出演があり盛会であつた。

(予 告)

○京都琵琶協会二月定例茶話会 二月一日(日)午後一時京都千本出水西入徳雲寺(電話(調)六九五二番)同好者の御来遊歓迎(当番幹事美登里進水、平井春嶺両氏)
○東京くれない会演奏会 三月十四日(金)昼東京伊勢丹ホール

(住居表示変更)

○水藤錦襪氏 東京都練馬区旭町三丁目二二の四
○松岡旭岡氏 西宮市二見町一ノ一

(電話 開通)

○大阪 東憲水氏(981)四四一六番

(計 報)

○足立芦光氏 旧臘二十五日午後十時五十分脳軟化症の為逝去、享年七十七才、謹しみて哀悼の意を表す

よ も や ま (敬称略)

○新春琵琶の集い 一月十二日十一時東京

第一生命ホール(主催筑前琵琶協会)
伽羅の兜 上野錦声、小川旭澄、絃大塚旭峰、鶴ヶ岡 中山旭礼、絃夏秋旭芳、衣川 一佐々木旭皓、禪師と正宗 本郷旭光、中西旭陽、木村旭香、絃旭芳、本能寺 堀川旭鶴、樋口旭秀、松尾旭松、安宅 金子旭昭、城戸旭海、丸山旭壮、絃山元旭錦、大楠公 膳場旭竜、北の庄 大塚旭峰、粟津ヶ原 稲葉旭隆、茶絃録 旭錦外、西郷隆盛 堤旭慶、亀田旭洋、大山旭勝、絃旭錦、重衡 中島旭晋、千住旭漣、絃旭錦、旭峯、旭良 入 那須与市 渡辺旭積、曲垣平九郎 井坂旭良、舟弁慶 押川旭葉、竜の口 山田旭芳、琵琶舞太田道鏡 旭錦外、吟尺八 竈立方入、石田三成 佐伯旭瑛、井伊大老 林田旭華、茨木 吉益旭扇、絃旭錦、関ヶ原 山本旭城、別れの盃 夏秋旭芳、平野国臣 山元旭錦、坂崎出羽守 浅野晴風、うづぼざる 水藤錦襪

○新春義士祭演奏会 一月十五日正午大阪

自安寺五階ホール(主催憲水会) 本能寺 三浦雪城、別れの盃 植田豊水、山科の別れ 小川吟水、赤垣源蔵 渡辺紫雲、村上喜剣 吉野洲水、田村邸名残の花 田中 踊水、絃矢吹華水、鉢の木 山之内兼光、大高源吾 馬瀬槍水、松の廊下(下) 藤原英水、清水一角 木庭旭山、加茂川の露 光田旭扇、雪晴れ 東憲水、外に詩吟七、舞踊三、新内小唄一、

あ と き

暮れまでの暖冬異変が正月から一変して俄かに冬將軍の来襲となつた。一ヶ月で春はそこまで来ている。それにしては早いのか、お正月の履蘇機嫌でうかうかしている内に早くも二月となつた、光陰何とかなうが本当に早いとつくづく思う。無理もない、アメリカが今年中に月着陸を計画し十年後には月世界への観光旅行も実現可能とか。そうなると思えばお月さんへの進出をそろそろ考えておかねばなるまい。科学の進歩はおそろしく、琵琶人としてボヤボヤしてはいられないような気がする。今年賀状を京絃社に沢山頂戴して感激しているがこの中に旧所在地宛のものが相当あつて十数通の転送を受けた、京絃社は昨年十月から左記奥書の場所に移転しているの御面倒でもお手許の住所録を訂正して下さい。御願ひ申上げる。尚肩書きの「和田第一ビル二〇一号」の書き落として二、三あつて郵便屋さんで叱られた。併せてお願い致します。

昭和四十四年二月一日発行(非売品)
編集者 植 村 寛 水
発行所 京 絃 社
京都市北区衣笠西馬場町二九
和田第一ビル 二〇一号
電話 八三二六 八二八七六番
内線 二〇一 一 番
(郵便番号 603)

琵琶 絃

京

絃

第一七六号

京 絃 社

「平家物語」の物語 (二二)

哀れ誘う女の訴え



：高野に年比(としごろ)知り給へる 鯉(ひじり)あり。三条斎藤左衛門太夫茂頼が子に、斎藤滝口時頼といひし者なり。もとは小松殿の侍なり。十三の年本所へ参りたりけるが、建礼門院の雑仕横笛という女あり、滝口これを最愛す。

横笛と滝口の悲恋物語。古来老いも若きも紅涙をしぼつた名ロマンス。平家物語のストーリーから一見はみ出した感もあるが、琵琶師のうらさびた調べて語られると、これはもう単なる挿話ではなくなる。平家襲滅への歯車が大きく回る時代の転換期を、一組の男女の心の動揺として浮彫りにしたものである。二人の恋はそれほど暗示に満ちている。横笛は建礼門院の雑仕女。彼女の悲劇は斎藤滝口時頼との出逢いに始つた。時頼は北面の武士、やがて二人は結ばれる。だが幸せは東の間、滝口の父母が二人の仲を割いた。卑

しい雑仕女が対手では息子の栄達は望めない。これが両親の厳命であつた。自分の意志を通すか、父の命に従うか、悩みぬいた滝口は「苦しみの俗世を捨て、仏道にはいる」と出家して了つた。十九の歳である。伝え聞いた横笛は、滝口恋しさの一念からある夕方、嵯峨野の方へさすらい出た。季節は三月半ば、漂い匂つて来る花の香に恋心は募るばかり、雲に隠れた朧る月が一層胸を締めつける中を漸く往生院で修業中の滝口を見つけ出す。紛れもない時頼殿の読経の声。今宵はあの人の胸で泣き明かそう。私の辛い心の裡を話したら屹度帰つて来て下さる。横笛は疲れも忘れていそいそと堂に近づいた。しかし滝口は遂に逢おうとしなかつた。一目だけども、と泣いて哀願する横笛の耳には、いのは、澄み切つた読経の聲と鈴の音だけ。彼女は再び絶望の淵へ投げつけられる。傷心の横笛はやがて奈良の法華寺で出家、念仏三昧に日を送るが、果敢ない恋に全生命

を燃やし尽したのか、間もなく死んで了。滝口は横笛来訪の直後高野山へ入り、横笛の死を知つてからは一層修業に励んだ。源平盛衰記や室町時代のお伽草紙では、横笛は往生院を訪ねた帰途桂川に投身、となつている。「つれなき命あればこそ、あかぬ別れも恋しけれど、たゞ一筋に思ひ切り、大堰川の水深なる岩間伝いの細道を、西に向いて手を合わせ身をこそ投げにける」お伽草紙の一節だ。二人の悲恋を支配したものの、それは歴史の曲り角にある不安と焦燥とみる。雄叫びあける武士文化が、みやびな京文化にどつて変るうとした時代、京に育つた男女の動揺は特に大きかつた。二人の上にも歴史という非情の陰が覆いかぶさつていたとは言えないか。横笛は恋一筋の女である。恋する人を訪ね、か細い足を選んだ積極さは、それまでの宮廷女性に見られない新らしさだ。そこには新時代を呼吸する女の情熱がある。然し半面、彼女には義経の愛人静のようなシンの強さが無かつた。滝口の遺俗が叶ぬ夢とわかれると、恋の破局を抗し難い運命とあきらめた女である、その古さゆえに我々は泣かされるのだが、一方、父母の言にあつさり恋を捨てて仏道入りした滝口。未だ栄華への夢が消え残つている父母とは逆に、彼は既に平家一門の将来を見抜き、新時代の到来を予期したのではなかるうか、「老少不定の世の中は、石を打つた一瞬の光に等しい」と彼に語らせる平家

物語は、世の無常さを歌い上げようとした。

滝口が庵を結んだ奥嵯峨の往生院跡をたづねる。その一角にある清涼寺奥の院を戦後佐佐木信綱が滝口寺と命名してから悲恋のメツカとなつた。高山樗牛の名文にひかれてか訪ねる男女は多い。祇王寺横の山道を登りつめたこの庵は、滝口と横笛の像が並んで見学者を迎える。庵の前には平家供養塔と重盛を祭つた小松堂がひっそりと建つ。山道を少し下つた所に横笛の歌石がある。「山深み思ひ入りぬる奥の戸の誠の道にわれを導け。」後世の作だろすが、薄幸の美女の訴えが胸に迫る。

新曲「マツカーサー元帥」

作詞 長 浜 南 城

不滅のいさを永えに 戦史の上に輝きて
八十四年の生涯は 時を昭和二十年
譽れは世々に朽ちず 君は戦艦最司令の長として
戦艦漸くおさまれば 帯びて降り立つ飛行場
日本統治の重任を 抱いて空に散り果てし
厚木の空を見渡せば あゝ昨日までは
英米露滅の意気は燃え 将兵何処影もなし
租国日本の運命を 命をかけて戦いつ
年まだ若き数千の 誰に怨みもなきものを
共に傷つき倒れ伏す

あゝ誰が為に戦える 感慨深く青空を
見上ぐる君が両頬に 光る涙を輝け
焼残りたるニユーグランド ホテルの窓に佇めば
眼に映る東京の 戦災の街荒れさびて
人影もなき都路や たとへ日本進駐の
使命は重く担え共 人間として一抹の
深き憂いを如何にせむ 服を閉ぢて元帥は
過ぎ来し方は敵味方 勝つも負くるも戦場の
世のならわし知りながら 万感胸に迫りけり
やがて天皇と会見し 昨日の敵は今日の友
共に精いっぱいわりて 固き握手を交しつゝ
名残惜しむし天皇を 独り門辺に見送りし
老将軍の両眼に 宿りし涙誰か知る
東京裁判の当日に 立ち辨代れば我れとて
戦犯者の第一に 立ち辨代れば我れとて
敗戦将士の運命の 無情のさきを洩らしたる
心の裡も床しけれ あゝ君は
東条内閣ミズリー号の艦上にて日本の降伏を受諾して
天皇制を強調し 憲法改正を始めとし
財閥の解体 農地や警察機構改革の
日本民主主義を表現し 戦後日本の再建に
貢献したるいさをせば たゞそなたをそそかりける
中共の爆撃を要請して志、遂に成らぬ
決然職を辞して日本を去る白蓮館内
君を迎えて歓声湧け共 老兵は死せず
只消え去るのみと叫ぶ
あゝ君の病は高まりて 陸軍病院の一室に
空しく逝きて帰らねど 不滅の偉勳たゞえむと
古き日本の琵琶の音に 悲報を嘆きかなてつゝ
その英霊を弔わむ 其の英霊を弔わむ

古代に於ける

日本建国の「謎」(一)

弓削仁正

(本稿は琵琶楽には直接関係が薄いかも知れないが、歴史ものゝ多い琵琶歌詞の探究上、琵琶人が常識として知つて置いて決してマイナスにはならぬと考へ、紀元前後から端を発して三百年頃の日本建国時代まで遡つて四回に亘り連載し、以て日本建国の真髓に触れたいと思う。御愛読を乞う。一編集部)

諸説紛々の古代史

古代史という以上、古代の歴史である事は当り前である。従つて人間が歴史として取上げ得る時代のことであつて、それ以前のことには有史以前として別の分野に於て学問的に取扱われている。然も茲に言う古代史は日本に限られた事であつて、史学に於ける古代全般のことではなく、極限られた範囲の事である。さてその古代史の限られた範囲をどの辺迄遡つたらよいかとなると、之も又仲々議論の多い処である。石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、白鳳時代、天平時代等、順に繰下げてみてもその範囲を決めることは、人によつて仲々異論のある処である。私は茲では大体弥生時代から古墳時代の日本建国の前後について今まで調べたことを

書いてみたいと思う。

日本人はどこから来たのか？古代史に就ては狙来、白石、宣長、君平等の徳川時代の学者から、内藤湖南、白鳥庫吉、津田左右吉、西村真治、折口信夫等の明治大正の学者、近くは三品彰英、井上光貞、直木孝次郎、江上波夫、小林行雄、上田正昭、橋本増吉等一寸想い浮かべても大変な学者の各自異つた学説に、どの先生のを信奉して日本の古代史はこれだ、と迷わず言い切れるものがあるだろうか。邪馬台一つを取上げてみても東大派、京大派を主軸にして、その九州説、近畿説が片付いていない許りか、現に早大の水野博士を交えての論争が続いている次第である。

日本という名の起源

日本にいつ頃国が出来たのか、これは仲々興味深い問題であるが、この時代の国といふのは現在考えられるようなものとは雲泥の相違で、情々戸数五百戸から一千ぐらゐの集団が国と呼ばれていた。例えば今の奄岐島、対島でも当時は一支国、対島国と称して立派に一国を成していたのである。当時といふのは紀元一〇〇年頃つまり一世紀か二世紀時分。尤も此頃でも大國が無い訳ではないが、それでも戸数一万戸位が抜群で、北九州の伊都國(今の糸島半島附近)がそれで、今の博多附近は奴国(なれのくに)と呼ばれて戸数二万戸と魏誌に書かれている。又當時は日本という呼び名はなく倭国(わこく)と言ひ、日本人は倭人と呼ばれてい

た。「日本」が國号として用いられたのは天智天皇(六七〇年頃)の頃とされている。即ち紀元六六九年に河内直隸らが唐へ派遣されたが(日本書紀)その時「倭の名を憎みて更に日本を号す」と「旧唐書」及「新唐書」(東夷伝)に記録されているからである。その理由として遣唐使は「國、日出づる所に近し、もつて名となす」と答えている。又七〇一年(大宝元年)に唐へ派遣された遣唐使粟田朝臣真人らが唐に到着した時、唐の人が「あなたはどの使節か」と尋ねたのに対し「日本の使節である」と答えている。余談だがこゝで面白いのは唐人のその時の言葉で「しはば聞いています(海の東に大倭國という國があつて之を君子の國といふ)、人臣は豊かに楽しんで居り礼儀の厚い國であると。今あなた方を見ると礼儀も大変立派です。信じない訳には参りません」と言つてゐる。(「続日本紀」慶雲元年七月の条)

又天皇という呼び名も建國當時は無かつた。天皇という文字が或は名称が用いられたのは六〇七年推古天皇の十五年に、小野妹子と造臣の鞍作福利が隋へ派遣された時に提出した國書に「日出づる國の天皇、日没する皇帝に書を致す、つゝがまきや」と記したのである。天皇といふ言葉も元は支那の仏教から来た「天帝地皇」を縮めたものである。更に又、「大和」という文字も「大倭」の「だいわ」から「大和」の「だいわ」に転用されたもので、古事記でも日本書記でも大和

という文字はなく、皆「倭」「大倭」が「ヤマト」と使用されて居り、七三七年(天平九年)「続日本紀」六國史まではヤマトは「大倭國」と記されて居る。ヤマトという発音は「邪馬台國」から来たもので、一般には邪馬台國をヤマトイコトと呼んで居るが、元来は和にあつた、という説もある。(未完)

狂醉亭漫録(四十五)

古 谷 寛 水



赤穂開城も恙無く終了したので、茲で浪士達の其後の動静を記述するのが順序であるが本稿の目的は大石という大人物の輪郭なり、人格を事件の推移と共に考察する事に在り、授業の問題を詳記しては逆も毎月一頁の短文では尽されないので、自今些事を省き主要事件のみを記述する事とした。

さて大石は仇討実行に先立ち思ひも寄らぬ一大障礙に遭遇したのである。それは吉良邸が江戸呉服橋内に在り、之は御朱引内と称し江戸城警固の範囲内に在り、毎夜見付の木戸を閉し役人を以て固め、大名旗本が特殊の門鑑所持者を除き、一般通行人は皆誰何されて居たので、赤穂浪士數十人の隊伍は到底通過の手段無く、従つて夜討乱入等は思ひも寄らぬ不可能事であつたのである。之に對する

大石の失望落胆は想像以上で、彼は到底解決の見込み無き苦境に追込まれたのだ。

然るに不思議な事には其年秋、突然幕府は吉良上野介に対し、当時は江戸郊外とも言える本所松坂町に換地を与え屋敷替えを命じたので、吉良は早急に普請し九月二日に移転を完了したのである。之は幕府が松の廊下事件に対する裁断が吉良に甘く浅野に苛酷であつた為、世論が喧しかつたので幕府も反省し、税政の一部たり共償わん為の処置と考えられたが、いつの歴史も権力者に都合の悪い部分は抹消されるのが例で、この件に關する史実は何れの書にも明かでない。

大石の赤穂出発は六月廿五日、山城八幡や京都には知人が多い為、一度男山八幡の身寄を訪ね、其後一旦帰した妻子を呼び戻し山科に隠棲するのだがその月日は詳知されない。併し八月十四日の亡君命日に、奥方瑞泉院所縁の京都紫野瑞光院で法要を営んだ記録がある。又大石の江戸への初下りは十月二十日京都出発、十一月二日江戸着、其月十日に始めて江戸の同志と集會を開いた記録がある。

此の前後の事実から推察すると、恐らく吉良への移転発令は大石山科到着前後頃かと思われ、従つてこの件に關しては大石は何等無関係の様であるが、此の辺に歴史の裏の裏があるのでは無かるか？

実に此の吉良邸移転の件は、忠臣蔵事件の成否を左右する重要事項であり、大石が如何に腐心したかは想像に餘りあるが、巷説は之

に對し穿つた觀察をしている。即ち

大石は山科到着早々、京都近衛家の臣垣見左内と変名し私かに江戸へ下り、在府中の浅野本家安芸守に拜謁し、苦衷の程を披瀝した。浅野侯も赤穂藩取潰しは外様大名に對する幕府の専横として内心穩かたならざる折とて何等かの對策を暗示し、早々老中秋元但馬守に迫つた。秋元も幕府の片手落ちに對し或程度は反省して居た折とて、早速幕閣會議を開き内々の議として吉良処分の件を出し、所謂會議決として吉良邸移転を發令したとある。之が講談浪曲で演ずる大石江戸探りの一席であるが、全部信用ならぬとしても、移転が實現された以上、先づ中らずと雖も遠からじの感がする。兎に角此の間の大石の苦慮たるや大変なもので、この大石の運動が事実にすれば、討入以上の大難事を完遂した事になり、彼一代の大功名とも稱すべきである。何れにせよ此辺が歴史の頗る曖昧な部分である。此件と並行して考うべきは米沢藩主上杉家の態度である。当主上杉正綱綱憲は吉良の奥子であり、上杉家に養子として迎えられ藩主の地位を襲いだ人である關係上、松の廊下の交後浅野家断絶が判明し、上杉家からは「上野介負傷後兎角に健康旧に復せず、何卒御役儀御免下され候様」と願出、四月廿六日其職を免ぜられ、更に九月邸替を申渡されるや直ちに吉良は上杉家に対し、米沢城での庇護を申入れたが、之はアツサリ拒絶された。米沢藩の大黒柱、筆頭家老千坂兵部は、赤

きく扱ひ充分問を生かして立派だが、乙の流は細かく撥を動かして妙音を聴かせようとするから、コセコセとして品(ひん)がない、従つて問と余韻に乏しい。

問 どちらがよいのです？

答 人によつて違ふが私は甲の方が好きだ、歌舞伎では團十郎芸というが下手な役者では出来ない、が乙なら芸が小手先芸だから真似がし易い、俗に言うトサ廻り芸だろう。

問 歌の方はどうですか？

答 これも好きですが、小じんまり謡うと楽だが声が腹から出ない、緩急直しきを得て丹田から声を出すのが琵琶の本筋だ。決して口先きだけで謡つてはならない。

問 あまり力を入れて歌つては綺麗には聞かせませんね。

答 錦心流には転がし節を使う人が多いが、是を余りつかうとキザでいかん。

問 琵琶は無我の境で演奏すると聞きますが、答 そうだ、歌中の人となつて謡わなければならん、かと言つて自己陶醉に陥入つて演奏するのは困る。公開の席では先づ聴者に感銘を与えなければならぬ、独りよがりになつて聴者を無視してはいけません。

問 歌中の人となつてはどうか？

答 まづ歌の文章をよく理解して、歌中の人物に成りきることをだ。

問 琵琶の節(ふし)は幾通りありますか？

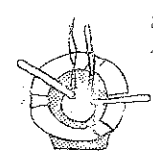
答 基本的には余り数はないが、同じ節でも文章によつて違ふから厳密に言うと一句一

徳の大石に劣らぬ大器で、大石とも従前から面識あり、お互に其人物を知悉した、言わば真の知己とも称すべく、千坂は大石が何事かを為すある事を信じ、万一吉良を米沢へ預つた場合変事の起る事も豫知され、不識庵謙信公以来世に聞えた上杉の名家に疵が付く。

単に当主綱憲の關係で、世間から指弾を受ける吉良を庇うか、又大義の爲に之を拒んで名家の譽を護るか、孰れが大事かの輕重を考慮し、仮令当主の面目を犠牲にしても自家の大事を護る事こそ忠節の本義であるとの明断を下し、吉良の米沢入を断乎として拒否したのである。尤も申訳の爲、吉良邸へ附人として相当人数の武芸者を送り吉良の身辺を擁護した事は周知の次第である。併し赤穂方の武力の程度も知悉した所置で、此の裏には赤穂浪士に對する同情の念の混つていた事は察するに餘りあり、之が復讐成就に大いにプラスした事は充分考えられる。

以上今回記述した二つの事実は忠臣蔵事件を通じ最大の山であつたのである。

琵琶問答



柿本 錦城

問 琵琶は歌が主ですか、弾法が主ですか？

答 楽器あつての琵琶だから弾法は決しておろそかに出来ない。が、歌のない弾法は無

問 蘭に公開するものではない。

答 ですが、人によつては二、三句歌つては長く弾く人があります。

問 それに弾法の違ふを聴かせようとするので、余り感心しない。

答 或は琵琶をほとんど弾かずに、歌ばかり謡う人もあります。

問 それは感心しない。のみならず歌の余情を琵琶に受けて、段落ごとに適當な手を弾くことによつて、歌も生き琵琶の価値も發揮出来るのだ。

問 概して正派の人は弾法に重きを置き、錦心流の人は歌に力を入れてるようですね。

答 弾法が違ふだと言つて歌の中で長々と弾く事は感心しない。第一、歌の後後が通じなくなる、又弾法が上手でなければ先輩に弾いて貰えばよい、下手な琵琶では歌が死んでしまふ。

問 歌も弾法も大きく立派に演じて貰うと、聴いていても氣持がよいですね。

答 そうだ、違ふだからと言つて撥を細かく扱つと問(ま)が取れない。

問 は、あ、弾法にも問(ま)がありますか？

答 あるとも、問(ま)と余韻は琵琶の生命だ、音の高低と問によつて音楽は成り立つている。他の楽器では出来ない余韻を充分生かす事によつて薩摩琵琶の真価が顯われる、鹿兒島には二つの流れがあり、武士階級に伝つたものと、座頭などが伝えた流派があり今では大分混同したが、甲は撥を大

問 蘭に公開するものではない。

答 ですが、人によつては二、三句歌つては長く弾く人があります。

問 それに弾法の違ふを聴かせようとするので、余り感心しない。

答 或は琵琶をほとんど弾かずに、歌ばかり謡う人もあります。

問 それは感心しない。のみならず歌の余情を琵琶に受けて、段落ごとに適當な手を弾くことによつて、歌も生き琵琶の価値も發揮出来るのだ。

問 概して正派の人は弾法に重きを置き、錦心流の人は歌に力を入れてるようですね。

答 弾法が違ふだと言つて歌の中で長々と弾く事は感心しない。第一、歌の後後が通じなくなる、又弾法が上手でなければ先輩に弾いて貰えばよい、下手な琵琶では歌が死んでしまふ。

問 歌も弾法も大きく立派に演じて貰うと、聴いていても氣持がよいですね。

答 そうだ、違ふだからと言つて撥を細かく扱つと問(ま)が取れない。

問 は、あ、弾法にも問(ま)がありますか？

答 あるとも、問(ま)と余韻は琵琶の生命だ、音の高低と問によつて音楽は成り立つている。他の楽器では出来ない余韻を充分生かす事によつて薩摩琵琶の真価が顯われる、鹿兒島には二つの流れがあり、武士階級に伝つたものと、座頭などが伝えた流派があり今では大分混同したが、甲は撥を大

きく扱ひ充分問を生かして立派だが、乙の流は細かく撥を動かして妙音を聴かせようとするから、コセコセとして品(ひん)がない、従つて問と余韻に乏しい。

問 どちらがよいのです？

答 人によつて違ふが私は甲の方が好きだ、歌舞伎では團十郎芸というが下手な役者では出来ない、が乙なら芸が小手先芸だから真似がし易い、俗に言うトサ廻り芸だろう。

問 歌の方はどうですか？

答 これも好きですが、小じんまり謡うと楽だが声が腹から出ない、緩急直しきを得て丹田から声を出すのが琵琶の本筋だ。決して口先きだけで謡つてはならない。

問 あまり力を入れて歌つては綺麗には聞かせませんね。

答 錦心流には転がし節を使う人が多いが、是を余りつかうとキザでいかん。

問 琵琶は無我の境で演奏すると聞きますが、答 そうだ、歌中の人となつて謡わなければならん、かと言つて自己陶醉に陥入つて演奏するのは困る。公開の席では先づ聴者に感銘を与えなければならぬ、独りよがりになつて聴者を無視してはいけません。

問 歌中の人となつてはどうか？

答 まづ歌の文章をよく理解して、歌中の人物に成りきることをだ。

問 琵琶の節(ふし)は幾通りありますか？

答 基本的には余り数はないが、同じ節でも文章によつて違ふから厳密に言うと一句一

句全部違ふ。

問 声の出し方はどうですか？

答 声には地声手声と言つても大小高低色々ある。例えば石童丸を謡う声と城山とは内容の人物、曲中の環境、心持ちが異なる如く声も節扱ひも違わなければならぬ。

問 それでは琵琶の修業も大変ですね。

答 その通り。琵琶の構成の基本は謡ひ出しから切(きり)迄は序文で、大干から後が本文、是が終つて大切り、それ以後が結びだが、この頃は大切りでやめる人が多い。

問 薩摩琵琶と錦心流では節が違いますね。

答 いや錦心流も薩摩琵琶なんだ、楽器に変わりはない、明治時代に初代吉水錦翁が薩摩の国から東京に移入して之を演奏したので始めて、琵琶が東京で流行しだしたので鹿兒島から色んな先生が出京して之を教えた。錦翁は古い歌を改作又は新作して琵琶の発展を計り、弾法や謡ひ方を定めて一人一人異なつていた弾奏法を芸術的に定め、帝國琵琶と称して錦水會を起こして門弟を養成した。その中にいた永田錦心君が之を東京風に演奏したのを誰言うとなく錦心流と稱し、後には宗家となつて此流派が榮える元を作つた。現在薩摩琵琶と稱しているのは前に話した通り錦心流以外の人が、錦心流と異なる総合名称だから厳密に言えばその師匠が違ふ毎に異なり。現に私も錦翁門下だが、錦心流とは違ふため薩摩琵琶と稱してゐるけれども、演奏上の精神は変つていな

い。それなら他の薩摩琵琶と同じかと言えは違うのである。強いて言えば岡部錦蝶女史と同じで、田辺錦波女史とも同じだが、田辺女史は錦心流に入つたので違うと言え。錦心流も「薩摩琵琶錦心流」と言うのが本当だ。我々以外の人は正派と称しては、吉水で生れた人の門弟も多く居るので、今では錦心流以外の人々は正絃会に纏まつたのである。従つて謡い方、節、発声法など皆違つた方が本当で、錦心流もこの例に洩れない。

問 帝國琵琶はどうなりました？

答 私等もその流れを汲んで居るが、同士が今は少ないから先生亡き跡絶えたも同然だが、其精神は生きて居る。私は吉水先生と、永く代積古をしていた浅井錦流氏以外の師には就かなかつたが、牧野錦光氏、小田錦虎氏の弾法が好きでよく聴いた。中央琵琶界から離れて五十年、この空白は仲々埋まらないが、来年は故先生の六十年祭を開催したいため精々勉強したいと思つて居る。

問 先程聞いた丹田から声が出ますか？

答 声は喉から出るが、俗に声は腹から出すとも言ふ通り腹がタルんでいては声に締りが無い。丹田は声の元締だから強弱色々加減をして弱ければ弱いなりに迫力がつく。迫力と強弱とは違ふ。尚吉水先生の錦水会は明治時代に十年以上続いて門生を養成したので、今では引退のまゝ、影を潜めて居る人もあろうが、当時盛んに活躍した肥後錦

師という長老の門から出て一本立になつたのが君塚隆盛、薩摩絃風などで、その門下は何人か今でも正絃会に居る。その他正派では永江鶴嶺という若い名手も居て、この門から出た人も現に活躍して居る。永江鶴嶺は永田錦心と別懇で、弾法と歌法を交換したと伝えられる。また錦心流の人が吉村岳城氏に弾法を習つた人が大分居る筈だから、錦心流と言つても薩摩琵琶に間違ひなからう。(昭和四十三年十一月稿)

足立声光氏の
死を悼む

植村 真水



青雲琵琶学院創始者足立声光(本名句規)氏が旧臘逝去された。一兩年前から健康勝れず自重の生活が続いていたが、昨年十一月二日自宅の庭で花木の手入れ中に倒れ、用米食慾減退衰弱を呈し、十二月二十五日肺炎を併発、遂に同夜近親の方々に見守られながら安らかに永眠された。

氏は明治二十四年五月広島に生まれ、大正五年二十四才で上京青雲学院を創立し、薩摩、筑前等の流名を捨て、日本琵琶楽院と総称し、五線楽譜の上に琵琶を載せて独習可能な道をも拓いた先覚者で、皇族貴顕の御前演奏は枚挙に遑なく、特に文、医学博士富士川游氏を

明治百年記念
維新の功労者西郷隆盛を

偲ぶ(下)



速島中の修業

あちこちをさまよつていた西郷は、安政六年正月十二日大島の竜郷村に落付いた。その時は幕史の手を逃れるべく菊地源吾と変名していた。西郷家は元来肥後菊地家の末にあたることから菊地の姓を用いた。竜郷では竜佐一という民家の一室を借りたのであるが、潜居しているのだから扶持米も届けられて居るが、朝夕の仕舞をする婢も居ず初めの頃は誠に苦勞の多い生活ではあつたが、土地の人が次第に西郷の人となりを知り、近隣の人々に読書の道を教えるなどして居る内に、炊事等女の子が手伝うようになつて読書その他ひまも出来てきた。この潜居中、相当修業をして居る。

扶持米の増加も國表から来るようになつた

が、島の細民の救助にこの扶持米を使つたのも相当あつた。更に大島では製糖事業が盛んで、之は薩藩の専売とされていたので薩吏の嚴重な監督があつたようだ。砂糖の年貢に就ては、百姓が天候その他の都合で予定されている量の不足者には藩吏から隠蔽の疑いがかけられて、口ごたえする者は奉行所に呼出され、甚だしい苛責が加えられることもあつた。西郷は是等の悪政を正して島民や藩吏を正しい理解のもとに製糖に従事せしめた。

さらに沖永良部落へ

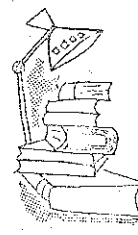
西郷が竜郷藩在中には勝安房が書いた通り身心を苦しめるものが多かつたが、その苦に負けては居ないで寧ろその苦に超越して居る。同年十二月十三日税所薦、大久保利道に送つた手紙には「着島より三十日も過ぎ候得共一日晴天と申す日は無御座雨勝ちに御座候、一体雨激しき所の由に候得共誠にひどいものに御座候、島の嫁女達美しき事京大阪杯が叶う丈に無御座候、垢のけしよ一寸許、手の甲より先はぐみをつき、あらよふ」。嫁女は鹿兒島の方言で嫁入前後の女の子の意、ぐみをつきは大島の方言で入墨をしているの意、あらよふは鹿兒島の女の言葉で「あらまあ」の意、西郷が女の語を用いた点にも面白い味があらわれている。

その間に薩藩では京都寺田屋の急進党鎮圧の大惨事が起こる。江戸では榎田門で井伊直弼が殺害される。薩藩内外共にいよいよ西郷に帰藩を促して指示して貰わねば如何ともす

することが出来なくなつて来たので、文久二年一月大島から帰藩することになつたが、僅か四、五十日目で又々藩主島津久光と意見衝突、久光の怒りにふれて、この夏は本島の流人として琉球に近い沖永良部落に流された。

藩刀は許されず舟牢に入れられ、文久二年八月十四日沖永良部に着港したが、牢獄建設中は尚舟牢生活である。牢は二坪余、四圍に戸はなく粗大を格子で囲むのみ、牢内一半は居所、一半は廁、疾風激雨防ぐに由ない状態である。毎朝一回半番に炊事をさせ、昼夜二食は熱湯で残飯を温め粗菜を添えるのみで間食はなく、常に正座して沈黙考の日を過ごしていた。

やがて幕末天下の伏魔は再び西郷の出馬を要するに至り、元治元年召還されて討幕に身を投出すことゝなつた。明治維新の第一頁を飾る大政奉還、江戸明城、勝海舟との会見等こうした事が端緒となつて列國と肩を並べ、明治の時代が始まるのであるが、明治十年惜しくも城山で悲惨な最期を遂げて了つた。



京都琵琶協会 料亭への申込み時機を失
忘年懇親会 して何処も満員で受け付けて呉れないため已むなく毎月例会場徳雲寺の座敷を借りて十二月二十二日午後から忘年会

が閉催された。夕刻まで弾交したあと懇親宴に移り飲むほどに酔うほどに表芸の琵琶よりも上手なあか抜けたしたよい喉の隠し芸が大森さんの粋な音締めの糸につて次ぎから次ぎへと続出し興酣となるや平素謙遜な某氏が立つて踊るなど年忘れの目的を完全に果たして八時半名残り惜しくも来年の再会を契り合つて散会した。当日は会員の外四明会の長老栗本天芳氏御夫妻も列席一段の興を添えたが二、三の会員が事故のための欠席は残念であつた。

(出席者) 伊吹正陽、戸倉旭嶺、若宮旭登、吉野洲水、田中鶴水、中島真水、矢吹華水、古谷寛水、小林旭光、木村維水、美登里進水、水内姫水、平井春嶺、植村真水、(敬称略)

新春各流 一月九日昼東京日本橋三越劇演奏大会
場に於ける東京新聞社主催、日本琵琶楽協会後援の演奏大会は各流派の名手が二十数曲を競演して盛会を極めた(入場料四百円)

山元旭錦女史 旭錦会が東京進出十五周年 全国 大会年を記念して一月十二日十一時から東京有楽町第一生命ホールに於て全国大会を開催、北海道、東京、箱根、彦根、大阪、福山、門司、八幡、戸畑、佐世保、鹿兒島等各地の橋会有名人多数が参集し山元會長の平尾國臣をはじめ琵琶二十三曲の外詩吟、詩吟物語、茶紋録、琵琶舞物語等を競演、又